

# 西田における形の生命論

濱 太郎

## はじめに

西田の思想において、生命に関する論述は早い時期から数多く見られるが、多くの場合それらは断片的なものであった。後期に発表された「論理と生命」（一九三七年）においてのように、議論の中心に据えて論じられることはむしろまれであった。しかしながら、そうした西田の論じ方こそ、この問題が西田の中で常に心に掛けられて問い直されなければならぬ問題だったことを表しているとも言える。その表題が示すとおり、「生命」（一九四五年）という、西田において最後に主題的に生命の問題が扱われた論文では、「生命とは如何なるものであるか」<sup>(1)</sup>という問いがまず掲げられている。晩年を迎えたこの時期においてなお、西田にとって生命は再び根本から問われなければならない問題であった。

この論文が書かれていた時期、高坂正顕に宛てた葉書の中で西田はその内容について触れている。そこには短く「生物的生命から歴史的社会的生命まで一貫して考える」<sup>(2)</sup>とだけある。しかしこの短い言葉には、その時点で西田が生命をどのようなものとして捉え、また語ろうとしていたのかということが如実に表されている。西田は後期において生物学的な観点から生命を論じるようになるが、同時に現実社会やそこでの実践的な行為と関わる仕方でも生命を捉えよう

ともした。西田の生命論の特異性は、多様な生命のありようを異なる領域にまたがって、可能な限り一貫した視点から論じようとした点にある。

このような西田の意図に沿った仕方での生命論を捉える方法があるだろうか。その手がかりは、西田の生命を巡る論述において、ある時期に見られる変化に着目することによって得られるように思われる。

西田の論述が論理性を帯びたものとして、いわゆる「生命論」としての体裁を整えはじめるのは、中期の西田が現実の世界を弁証法的な論理に従って把握するようになってからだと考えられる。それに伴って、生命現象が、環境とそれを変じる主体の間の弁証法的運動として捉えられるようになる。以降、西田はその枠組みを用いて生命の諸相を解き明かそうとする。その際、生命の弁証法的運動は、西田において主体と環境の間に引き起こされる形の形成作用と見なされる。そうして、最終的に生命は、「形が形を生む」、「形が形自身を限定する」といった切りつめられた表現で記述されることになる。

ここで用いられる「形」という言葉には様々な含意がある。生物的生命の世界において、それは身体を持つ形態ないしは構造を意味し、種として生物の行動のパラデューグマを表す。歴史的世界の中での制作において、我々は自己の外に形を作り出しその形の内に表現された自己を見る。それらの多様な意味を担った形という概念は、アリストテレスやホルデン、ゲーテなど西田が研究した思想家たちの影響の下に形作られたと考えられる。

本稿においては、西田の用いる「形」という言葉を鍵として、主に中期以降の生命に関する西田の論述を対象に、西田が自らの思想の中に昇華した諸々の他の思想との影響関係を中心に検討する。それによって「形」という言葉に込められた多様な意味を明らかにするとともに、先の表現に至る西田の意図を探ることで、その生命論にひとつの一貫した見通しを与えたい。

## 一 生命と形の邂逅——ベルクソンと西田における形

西田が形と生命を結びつけるのは、どのような脈絡においてであろうか。その萌芽は西田哲学の初期にまで遡ることができる。そこでは形と生命が直接結びつく仕方、そして後期には両者の関係性に重点を置く仕方、問題にされているが、注目されるのは、いずれの場合にも、ベルクソン哲学に対する西田の理解が少なからず関係している点である。

西田の形への志向は、早い時期のものとして、初期の芸術論の中に見出される。西田にとつて三番目の著作に当たる『道徳と芸術』（一九二三年）で展開される芸術論では、とりわけ絵画や彫刻といった造形芸術を中心とした考察が展開されている。すなわち、ここでは色や描線による輪郭を持った芸術、形を与えられた芸術が問題にされている。ここで西田の芸術論の検討から稿を起すのは、無論単に形との関わりからではない。ベルクソンの強い影響下にあった初期の西田において、芸術創作を通じて生み出される形が既に生命と密接な関係性の下に捉えられていることを押さえるためである。

形を介した芸術と生命の結び付きは、後期の芸術論「歴史的形成作用としての芸術的制作」（一九四一年）において、直截に「芸術とは歴史的生命の形」<sup>③</sup>であると言われるように、後に至るまで西田の思考の底流にあったと考えられる。無論前期の西田における形と、後に検討を加える後期のそれとは、意味合いは必ずしも同じではない。しかしながら、生命という何処までも動的なものが凝固し、形をなして現れるということに、西田は一貫して深い意義を見出していたと考えられる。

前期西田の芸術論を見る場合、本来ドイツの美術史家フィードラーの名を欠かすことはできないが、ここでは先的事情からベルクソンとの関係に焦点を絞って見ることにしたい。西田はその思索の生涯を通じて、ベルクソンの思想に対

する関心を持ち続けたが、中でも前期における両哲学の親近性はしばしば指摘される。西田のこの初期の芸術論においてもベルクソンの影響は色濃く表れている。この『道徳と芸術』に収められた一連の芸術論の中で、西田は、やがて芸術作品へと結晶化する内面的な「生命の流」をベルクソンのエラン・ヴィタール（の流れ）と重ね合わせている。

芸術作品は我々の内面的生命の発露である、我々の人格の創造である。ベルクソンの言の如く眼は視覚作用の掘割であり、……芸術作品は我々の眼という如き掘割の中に盛りきれない大きな生命の流れによって穿たれた実在と考え得るであろう（三・六九）。

西田がここで引いている眼の話は、芸術との繋がりにおいてやや唐突な印象を与えるが、ベルクソンが『創造的進化』において眼の形成過程を説明するために記した文章から引かれたものである。ここでは、エラン・ヴィタールの流れが通過する時に作られる運河ないしは溝が眼という器官になると説明されている。それを踏まえて、芸術作品とは、横溢する生命の流れが眼という物質化によってはその勢力を使い尽くされず、さらにその余剰によって生み出された形であつて、内的生命の流がその終端において形象化したものと西田は考えているのである。

しかしながら、生命の流とエラン・ヴィタールを重ね合わせた西田の理解において、その造形作用としての意義を強調するのは、ベルクソン哲学に対するひとつの誤解を含んでいると言わなければならない。誤解という言葉が強すぎるならば、少なくともそこには西田が他の思想家からその思想を吸収する際にしばしば見せる自己の思想への引きつけが働いていたとは言えるだろう。周知のように、ベルクソンにおいて生命哲学のひとつの課題は、エラン・ヴィタールそのものを内的な直観によって掴むことであつた。既にできあがつてしまったものを分析することにはベルクソンは殆ど

意義を認めていない。流れから生まれた芸術作品がいかにも生命感を湛えたものであるとしても、流れそのものに比すれば何処までもその痕跡に留まる。ベルクソン自身は芸術に対して深い造詣を有していたが、ベルクソン哲学の立場からこの痕跡に本質的意味を与えることは難しいと言わざるを得ない。

おそらく、西田がベルクソン哲学に求めたのは、形を作り出す根源的創造力としての生命の流であり、エラン・ヴィタールであった。だからこそ、西田は後期に至って、ベルクソンからの思想上の隔たりがはつきりと意識されていたにもかかわらず、なお（このような言い方が本質において成立するのは疑問であるが）「造形的エラン・ヴィタール」なる言葉を捻出し、用いようとしたのではないか<sup>50</sup>。その点に注意が向けられていたために、前期の西田においては後の対立の芽が内に隠されたまま、ベルクソンへの共感が成立していたと言えるのではないだろうか。

その対立が露わなものになったのは、西田の思索が中期から後期にさしかかろうとする時期においてであった。西田のベルクソン生命論に対する端的な批判は、生命の空間的な現れとしての形、すなわち物質的な側面についての軽視ないしは欠如という点に向けられている。確かにベルクソンは、自らの思想においてこうした点に重きを置かなかつた。この時期西田は比喩的に、ベルクソンの哲学を音楽的と捉え、それに対して自己の哲学を造形的と位置づけているが、ベルクソンとの方向性の違いを明瞭に意識していることがここからも知られる。

なぜ、西田において物質性や空間性の欠如がベルクソン批判の理由となるのか。それは西田の哲学がこの時期にたどった経緯に関わっている。西田は中期の論文「私と汝」（一九三二年）において生命を個物と環境との相互限定という枠組みにおいて捉えようとした。そこで既にその相互関係を弁証法的なものとしていく方向性が示されているが、後に『哲学の根本問題正・続』（一九三三・三四年）を経て、弁証法が西田の哲学に深く根を下ろすようになると、生命は明確に個物と環境との間の弁証法的運動として捉えられるようになる。

そうした弁証法的生命把握においては、物質がその否定的な要素として重要な意味を担う。単なる内的連続性ではない、非連続の連続としての生命の活動は、この物質のもたらす否定性によつてはじめて運動性を持つのである。またさらに、その否定性こそが主観に回収されない生命の客観性の根拠ともなる。

したがって、西田において実在的な生命は全て形ある物として現れなければならないことが強調される。

生命には形態というものがなければならない。そこには既にエイドスのものがなければならない……ベルクソンの生命といふ如きものは唯内的連続に過ぎない。形を見ることなき生命は情緒の如きものに過ぎない。具体的生命は造形美術的でなければならない（七・二三八）。

このように両者の間に隠されていた思想の隔たりが顕在化するとともに、西田はベルクソンの生命理解を積極的に批判し、自らの生命論との差異を際立たせながら論を展開する。そのため、この頃から西田において生命を一つの流れとして捉える見方は徐々に失われていくことになる。生命は形を持ち、形を持った個が環境との関係において相互限定的に、しかも非連続の連続としてそれ自身の形を变じるといふ、形自身の形成作用にその目が向けられるようになる。

## 二 生きた形としての身体

### ——アリストテレスとホールデンにおける形態学的思考と西田の形

生命が形を持つことを西田は後期の思索の中では、身体の問題に結びつけて論じる。生命にとって身体とは如何なる

意味を持つのであろうか。それを明らかにするためには、身体が現実には置かれていない場、すなわち環境と如何に関わっているのかを問題としなければならぬ。というのも、生命が生物的な身体としてそれを取り巻く環境の中で生きている限り、そこでは身体の器官や細胞が具体的に如何なる働きをなしているのかという、環境内でのそれらの生理学的な働き(機能)が考慮されなければならないからである。

西田においてそうした観点から考察がなされるようになるのは、「論理と生命」以降のことである。西田が生物学的な領域へと自己の生命論を進めることができたのは、その頃、イギリスの生理学者ホールデンの思想と接点を持ったことが大きい。そのことによつて、それまでの個物と環境との相互限定という弁証法的論理に基づく把握が、さらに生物学的な生命論として展開されることになった。その際、西田が出発点としたのは、アリストテレスの生物に関する理解であった。西田が関心を寄せるアリストテレスの生物哲学において、実際に生物というものがどのように語られているのか、西田の注目した『動物部分論』<sup>(6)</sup>を中心に、ここでおおよそその内容を見ておきたい。

アリストテレスにおいて、ものの本質を表す形相と材料としての質料の複合体である生物は、彼が実体と呼ぶ第一義的存在の典型と考えられ、最も重要な研究対象の一つであった。そして、その実体としての生物の持つ形態は、それがその生物の本質としての形相と密接に関係していると考えられるが故に、アリストテレスの生物学においてとりわけ注意を払うべき要素と考えられた。アリストテレス哲学の文脈において通常形相と訳されているその言葉(エイドス)は、もともと見られた形という原義を持つが、生物においてその意味はより際立ったものとなる。

アリストテレスによれば生物を説明する場合、その生物が何からできてくるか、すなわちその質料について説明するだけでは不十分であり、むしろその生物がどのような形をしているか、すなわちその形態が語られねばならない<sup>(7)</sup>。『動物部分論』やその他生物学関係の諸著作において、彼は実に多くの生物の特徴的な形態に注目しそれらをつぶさに観察

して分析を加えている。

しかしながら、生物が持つ身体器官の形態は単なる生物の体の表層的外形、輪郭として考えられているわけではない。アリストテレスにおいて生物の身体器官が持つ形態は、常にそれが具えている働き（機能）を遂行できるものでなければならぬ<sup>(8)</sup>とされる。というのも、彼にとって生物が生きているとは、その本質（形相）が十全に発揮され、現実化している状態を意味すると考えられているからである<sup>(9)</sup>。したがって、生物の身体器官の形態には、既に何らかの働きが反映されていなければならない。その上で、諸々の器官の集合としての身体全体は、はじめて生きた身体と見なされるのである。

このような内容を持つアリストテレスの生物哲学について、西田は一九三五年に行った講演「歴史的な身体」の中で以下のように触れ、自らの関心を露にしている。

骨や筋肉は元素の結合であるだけではなく組織であり、さらに鼻や目になると、骨や筋肉のような組織だけでは説明できない。それには何らかの機能 function があるとアリストテレスは言っている。我々の肉体が生きているとは機能的であるということ、機能を持っているということである（十二・三五二）。

アリストテレスにおいては、等質部分と呼ばれる組織と異質部分と呼ばれる器官とが区別されるが、ここで西田が注目するのは、鼻や目に限らずあらゆる身体器官については必ず何らかの機能が備わっており、そうした生物の肉体は単に物質的なものによつては説明できないという点である。

西田はこの講演の直前に発表された論文、「論理と生命」においてもアリストテレスの『動物部分論』を引きつつ、



生命の身体を構成しているものは単なる物質ではなく、「機能的物質」によって構成されるとしている<sup>10)</sup>。すなわち、西田は身体を物理化学的な分析によるのではなく、その機能によって理解すべきだと考えるのである。さらに言えば、形としての身体は、何らかの機能を具えた諸々の器官の集積からなるひとつの構造体と考えられている。

以上のような理解を踏まえ、そこからさらに西田はホルデンの思想と関連づけ、生命の形としての身体についての考察を具体的な生物学的現象へと進める。西田は講演「歴史的身体」の中でアリストテレスの生物学的思考に触れた後に、次のようにホルデンを紹介している。

生命は形である、決まった形である。例えば私の身体は新陳代謝しているが、私の身体が永続している間は私が生きている。そういう形には何か機能的なものがあると「ホルデンは」言っている。形と機能とは一つのものであるという morphological 「形態学的」の考はホルデンにもあつて、アリストテレスの古代のみでない（十二・三五三）。

古代のアリストテレスの生物哲学と、当時の最先端にあつた生命科学とを西田が形態学という観点から結びつけている点に注目したい。ここで特に、アリストテレスとホルデン、両者の思想の中に生物的身体における形態と機能の一致という考え方がある点に目が向けられている。これを踏まえて、西田自身「生物の形態と機能とは分かつべからざるものでなければならぬ」<sup>11)</sup>と述べている。この主張は以後、生物学的な身体についての西田の基本的な捉え方となる<sup>12)</sup>。西田が読んだホルデンの著作『生物学の哲学的基礎』には、ホルデン自身によって形態と機能についての考えが表明されている。ホルデンが活躍しはじめる一九〇〇年代頃まで、実験的手法を基礎に置く生理学を中心とした医学

的分野と類比や比較による推定を含む形態学を中心とした博物学系の分野とは、長らく分裂状態にあった<sup>(13)</sup>が、博物学に協調的な分野の研究に科学的手法が持ち込まれるようになる、両分野の隔たりがそれほど目立たなくなり始めていた。そうした流れの中で、ホールデンはこの著作において、形態学を中心に研究されてきた生物身体の構造の問題と生理学において研究されてきたその機能の問題は、区別して取り扱われるべきではない<sup>(14)</sup>と主張したのである。まさにその点で、西田はホールデンの立場にアリストテレスと通ずるものを見る。

では、ホールデン自身は、そうした形態と機能の一致を具体的にどのようなものとして捉えているのであろうか。それは主として、生物の身体が自己を取り巻く環境と如何なる仕方で関わっているかという、ホールデンが専門としていた生理学の領域において語られることになる。ホールデンによれば、「形態学とは有機体各部の構造の内に見出される関連性及び、構造の環境に対する関係性を取り扱う」<sup>(15)</sup>。ここで明瞭に言われているように、身体という形を持つ機能は、環境との関係において考えられている。アリストテレスの生物哲学にも環境との関係に基づいた目的論的な洞察が含まれており西田への影響を疑わせるが、西田が身体を環境との関係において考えるのは、やはりこうしたホールデンの見方によるものであろう。

その関係性を見る前に、身体の機能が、西田においてどのように理解されているかを確認しておきたい。西田は同じ講演の中で身体器官の機能についてさらに次のように述べている。

機能的とは何か形作ることである。生物学からは、我々の生命というものは細胞のようなものに由って成立すると考えられる。人間の細胞は人間を形作り、他の動物の細胞は他の動物を形作る(十二・三六四・五)。

ここで西田は、機能というものをまずは微少な視点から（後に見るようにより大きな視点からも語られる）、細胞の生成という自己形成的な働きとして解釈している。西田によれば「機能は形作ること即ち形成作用」（同所）ということになる。

このことを確認して、再び形態の問題に戻る。ホールデンにおいて生命の持つ形態は、「特殊なる規準的構造」と呼ばれる各々の生物種に固有なボディ・プランとしての身体構造を意味する。その点を西田は「規準的構造とは一種の形である」<sup>(16)</sup> と言いつづけている。ホールデンによれば、そうした構造は外的環境に対していわば内的環境と見られるべきものである。呼吸やその他ホメオスタシスのような有機的活動によって、生物は自己の内的環境を外的環境から維持する。西田は「整合的なる特殊形の自己形成的維持が生命である」<sup>(17)</sup> という表現でホールデンの中心的な主張を要約している。無論、ここで「自己形成的維持」というのは西田の独自の解釈であって、ホールデンの原文を当たっても正確に一致する表現は見出せない。西田は、ホールデンの言う動的な構造の維持を身体に具わる機能としての形成作用によるものと解釈するのである。

それでは、形が環境の中にあつて自己形成的に自己の形を維持するというのは、どのような事態を表しているのだろうか。この点について西田はさらに次のように述べている。

生命は環境を自己に同化することによって生きるのである。環境というのは物質界であり、環境を同化するということは物質を或形に形成することである。かかる意味に於て生命とは形成作用である。生命が環境を同化するのは細胞作用によるのである、自己を個物的多として環境を同化するのである（九・二六）。

西田はここで、生物の身体におけるこの細胞レヴエルでの形成作用によって環境との同化がなされているとする。この環境の同化ということで考えられているのは、各々の細胞が環境から酸素や栄養を取り込んで自らの内でそれらを変じ、その取り込んだ物質を利用することで自らを複製するという現象だと考えられる。そこで、内的環境は外的環境と相互関係を保ちながら自己の形を維持する。先のホルデンの紹介に見られる「新陳代謝」という言葉も同様の現象として理解される。

さらにこの内的環境としての身体構造の外的環境に対する維持は、環境に対する主体としての身体と環境との相互の弁証法的関係としても捉え返される。全体的一としての身体は、自己を無数の細胞（個物的多）として「環境化」することによって環境としても捉え返される。一方で、上述のように環境から物質が吸収され身体が自己形成されることで環境は「主体化」されるということになる。すなわち、主体が環境化し環境が主体化するという仕方、内的環境と外的環境が相互に関係するのである。

以上のように、環境との関係における生物の身体構造に関して、西田はホルデンの思想の中にアリストテレスと類似した形態と機能の一致を見るとともに、身体の形の自己維持的な形成作用という考えを見るのである。すなわち、西田において生物の身体（器官）の持つ形（構造）そのものが形成作用を伴うのであり、その形は静的なものとしてではなく、動的な働きを内包したものと捉えられている。

このように、ホルデンを吸収したことによって、西田は既に持っていた個物と環境の相互限定という思考の構図を極めて具体的な生物学的文脈において理解するとともに、その弁証法的関係の意味をいっそう深く捉えることができたのである。ここには既に「形が形自身を維持する」という西田の生命論の核心をなす思想が現れている。

ただし、ここで注意されなければならないのは、この「形が形自身を維持する」という表現が、単に身体における生

物学的な現象のみを表したのではないという点である。この表現は西田が生命を歴史的な生命として意味づける際、歴史的種や歴史的な身体としての個が形を生み出していくありようをも捉えたものでもある。生の表現の意味を明らかにするためには、そうした種や歴史的な身体などを問題としなければならない。

### 三 形としての種——歴史的形成作用の主体としての種

前章において形としての身体が環境と如何に関わるのか、その機能に注目して論じた。身体は環境から被る刺激に対した受動的に反応しているわけではない。かといって、もちろん全く無秩序なものでもない。そこには、幾らか振幅はあるにせよ、その生物に特有の何らかのパターンがある。西田は身体という形を自己形成作用と一体のものとして捉えたが、その作用は生物が持つ固有の形を維持するための働きであった。見方を変えれば、生物の固有性はその形態が保持されることによつて成り立つのであり、それによつてはじめて他の生物から区別され、分類されるということになる。その結果、そうした固有性を備えた集団として、生物の種というものが考えられる。西田はこの生物学的な種概念からさらに進んで、独自の種に対する考えを導き出す。

西田は、種とも訳されるギリシア語の *genos* がそもそも見られた形を意味することを念頭に置きつつ、種とは形作ることを意味し、まさにその点において種は形なのだとする。種が規定されるのは、環境からの刺激に対して如何に働くかによつてであり、形の維持において見られた細胞の複製作用（すなわち形成作用）は、それぞれの生物集団に固有な働きと考えられる<sup>(18)</sup>。すなわち、形としての種は単なる物體的な形を表すのではなく、形を生み出すある特定の仕方、形成作用の形式を意味する。

こうした種の規定の仕方は、西田自身が認めるように、通常生物学的に考えられる意味での種の定義と異なつた点に分類の基準を置いていることを示している。ここでは種の区分が、当時の生物学<sup>(9)</sup>における静的な形態的特徴に基づいてではなく、形態と機能を一体のものとする見方に導かれて、形の持つ動的な働きを重視する観点からなされている。ひとつの種はその形態において固有であるというよりも、むしろその形成作用において固有だと考えられるのである。

無論、西田はここで種分類そのものを変更しようとしているのではない。また、種がそれを構成する生物の集団からなるという従来の種の意味をも依然として西田の種概念は含意していると考えられる。しかしながら、西田の力点は、その種に特有な形成作用、それが如何に遂行されるかという、その働き方に置かれている。

こうした西田の種に対する見方は、ホルルデンにおいて見出された「規準的構造の維持」という考えが下敷きになっていると思われる。西田はそこからさらに拡張された意味を引き出している。

種とは我々の行動のパラデューグマである。環境が生物を如何に刺激するか、生物が環境に対して如何に働くか。それぞれの動物に特殊な行動の仕方があるのである。それがホルルデンの所謂規準的な種の構造と環境との能動的維持というものであらう(九・二八—九)。

西田はここで、種をその生物の規準的な構造を維持するための行動のパラデューグマ(範型・規範)として捉えようとしている。これにより、生命が身体という形を得た時点で、その形(人間としてのそれであるのか、牛としてのそれであるのか等)によって、それを取り巻く環境に対する行動・動作をも規定されていると言うのである。すなわち、ホメオ

スタシ的な形の維持活動という微小なレヴェルの形成作用から、さらに身体的な行為・動作へと種の影響の及ぶ範囲を拡張している。

そうした行動の例は、その生物に特有の本能的行為などに見ることが出来る。生物は確かにその種に特徴的な行動によって、自らの持つ構造を安定的に維持していると言える。補食のための行動や反射的に自らに害を及ぼすものから体を遠ざけるような動作はそのような意図を含んだものと考えられる。さらに進んで、子孫を残すための生殖活動などは、自己の構造のみならず、ある意味で種の構造を維持するための活動とも考えられる。西田はそれぞれの生物の形態が微妙な差異を含む限り、こうした諸々の行為にも微妙な差異が生じ、それぞれ固有なものとして相互に識別されると見ている。

こうした生物の維持活動の固有性が認められるとすれば、それによって、個々の生物の活動は極めて限定されたものになる。言いかえれば、種が持つ範型としての規定性は、それに属する個に対して強制的なものとして働く。それを西田は種—個の関係性における否定的側面と見ている。

生物的生命の世界、種の世界においては、個もなければ制作もない。主体といっても、衝動的である、制作的な主体でない（八・一七八）。

すなわち、ここでは、個が種の中に飲み込まれ、行為をなす主体として自立した個とは成り得ていない。いわば「種の奴隷」として個は種に完全に従属的な意義しか持たないことになる。こうした種の規制的な影響力は、当然ながら生物的な生命の世界における行為、すなわち本能的な行為にも及んでいる。そのような「生物の動作はただ種的」<sup>(20)</sup>であり、

そこに自由な意志が入り込む余地はない。

人間もまた、一面において生物的生命としての側面を持つ以上、こうした種の規制の下にある。人間も生物的な性質を帯びた行為（本能的行動や衝動的動作等）に關しては、何処までも種の影響下にあるのである。しかし人間の行為はそうしたものに限られない。人間の生命<sup>(21)</sup>として、それに特有の行為をなす。我々も確かに「種の個として種から生まれる」が、しかし決して「種の奴隷ではない」。ここで言う人間に特有の行為とは外に物を作ること、つまり制作を意味する。人間の生命は自由な制作的行為をなす点にその特徴を持つ。

我々の制作と生物の身体的構成との異なる所は、生物に於ては種が自己自身を形作る、生物は種の奴隷である。之に反し我々も無論種の個であり、我々の行動も種的ではあるが、我々の制作は自由と考えられる（八・一五〇）。

そのような人間のみに該当する範型を西田は社会とし、生物的種とは異なるものとして区分した上で、歴史的種と呼ぶ<sup>(22)</sup>。西田の種を巡る議論では両者の差異が繰り返し問題にされる。その差異は、二つの種それぞれの個との関係性にある。生物的種は個を使役して自己の種的な形を維持しようとし、個はそれに何処までの従属的である。それ故にもはや個が個ではないとさえ言われる。それに対して人間は個において、社会としての種にただ従属するのではなく、一方で「種を破るもの」であり、「何処までも種から限定せられるものでありながら、種を限定する」<sup>(23)</sup>。

それは先に見た、個の自由が認められる制作において顕著に認められる。我々はしばしば何か新たなものが制作されることによって、社会の変容を見る。それは我々自身の行為の仕方、すなわちパラデーグマの変容を意味する。例えば、個の制作においても問題となる、技術という具体的な行為の形においては、しばしば技術革新によって種の形の変容が



起こりうる。我々は歴史的種の個として、種の規定性を破り、新たなパラダイグマを生み出す可能性を持つのである。「……生命は矛盾の自己同一として形成的であり、いつも種として固定せる形を有しながら、形を破り行く可能性を持つ所に生命があるのである」<sup>24</sup>と言われるように、西田はそのような否定を介した形成作用にこそ其の生命の姿を見出している。

無論、環境に対して種がその形を形成的に維持するという点で、歴史的種と生物的種は根底において共通性を持っている。しかし、その具体的な維持の仕方において両者には大きな差異がある。社会が上述の個との関係において自己の形を破るような仕方では自己自身の形を時に激しく変容させるのに対して、生物的種においては何処までの種としての形が守られる。もちろん生物的種においても、突然変異というような事態が考えられるが、西田はそこに真の意味での創造性を認めていない<sup>25</sup>。生物的な種の変異は、西田の言う形を破るといふ、自己否定的で根底的な創造とは認められないためであろう。それに対して、歴史的種においては、個の自由な創造的制作用によって種の形が大きく変ぜられる可能性がある。

既に触れたように、西田は当初、生命における弁証法的関係を個物と環境の間に想定していた。個物が環境を変じまた環境が個物を変じるといふ両項の関係性には、まさに弁証法的な相互否定的関係をそのまま当てはめることができる。しかしながら、西田は、田辺元からの批判を受けて先のような種の問題の重要性に気がつく、個物―環境の関係性においてのみ生命を語ることは十分でないと考えようになる。生命というものを具体的な現実世界における現れから捉えようとするならば、単なる個と環境との関係においてだけでなく、社会・文化・民族・国家といった、種として集約される形態とそれらに属する個が如何に関わっているのかということも問われる。

西田はそこで環境に対するものとして単に個物ではなく、代わって主体という用語を導入し、対置させる。西田にお

いてこの主体という概念は、種という概念が論じられるのに伴ってほぼ同時期に用いられるようになった言葉である。「歴史的世界に於ては、いつも歴史的主体というものと環境とが対立する」<sup>(26)</sup>とされ、環境を變じ形作るその主体のことを指す。いわば役割語であり、見方によってそこに個が据えられる場合もあれば、種がくることもある。これ以後西田は、主体—環境という枠組みを用いることによって、特に人間的生命としての側面から、生命が織りなす歴史的な形成の働きを語ることになる。

世界を形作る歴史的な形成作用が巨視的に見られる時、種としての社会や文化もまたその形成の主体として考えられる。それは「歴史的生産様式」とも言い換えられるような、物を生み出す形成作用の形であり、形式である。西田において種としての形は、既に論じたように、物的な形というよりもむしろ形成作用の形を意味するものであった。そのような形式とも捉えられる形が、如何なる意味において作用の主体となりうるのであろうか。

例えば、次のような事態を想定することによってそれは理解される。我々がある生産システムを用いて何等かの製品を作る場合に、通常その作業主体は我々である。しかし、むしろそのシステム自体が、個物的多としての我々を役とし、全体的一として主体的に物を生み出しているとも考えられる。そのように見れば、種を個と同様に形成作用の主体と見ること自体に不自然はない。実際、種を歴史形成の主体と見るこうした見方は他の京都学派の哲学者にも見られる<sup>(27)</sup>。

西田において種と環境との関係は、個が主体として環境に相対している関係とパラレルな関係において考えられている。西田が「歴史的主体としての社会は自己自身の中に環境を持つのである（ホールデンが内にも環境があると云う如く）」<sup>(28)</sup>と指摘しているように、歴史的種はあたかも一己の個として環境において自己の形を維持している。確かに社会としての種は、それに固有の制度や組織といったものを持ち、それらはその内部においてのみ働く法則性を有している。種の持つそうした内部形態を自然の環境から区別された内的環境と呼ぶことができるであろう。そこでは、先に

論じた個の身体が外的環境に対してそう呼ばれ区別されたのと同様の関係性が成り立っている。歴史的種もまた環境に對しつゝ、内的環境としての自己の構造を維持していると考えられるのである。

この歴史的種について西田は、一九四〇年に刊行された『日本文化の問題』の中で、「歴史的種としての我々の社会というのは、矛盾的自己同一的な世界の種々なる自己形成の仕方」<sup>(29)</sup>であり、「社会は世界の自己形成としてイデオロジックである」<sup>(30)</sup>と述べている。すなわち、社会は生物的種の如く単なる自己の形の維持に留まるのではなく、自己の形成作用がまた自身の相對している世界そのものを形成するものと考えられ、その場合には社会の持つ形成の仕方がイデオロジックなものでなければならぬとするのである。

しかしながら、既に触れたように、歴史的種としての我々の社会において、個は時にその形を破るような自由を持つ。すなわち、社会は生物的種の如く単に自己の形を維持するだけでなく、自己の形成の働きを通して世界そのものを形成する。しかもその場合、社会の形成の仕方がイデオロジックであるということが言われる。しかし、種としてのイデオロジックは固定された永久不変なものではない。西田はそれをプラトンのイデオロジックに對比して「動的イデオロジック」<sup>(31)</sup>と呼ぶ。種はその時、その場所で、環境との關係において自己のイデオロジックを動的に更生されていく。歴史的種は絶えず形を変じていくことによって、むしろ自らを維持していくのである。

その際、歴史的種における個は自らの形を変容する契機であり、個の制作の自由によって、メタモルフォーゼ<sup>(32)</sup>的な根本的生産形態の変容が引き起こされる。それに対し、生物的種は自己の形態をできる限り同一性を保つ仕方でも維持する。それは個における形成作用もまた、あくまで反復的で自己維持的な形成作用に留まるということを意味する。

このように、歴史的種は個を役として自己の形を維持し、また同時に、自己の変容を通して歴史的な世界を形作ってゆく。その意味において種は形成作用の主体であるが、しかし種が環境に對して直接働きかけることはできない。

主体と環境の相互限定として、世界が自己自身を形成すると考える時、歴史的種が主体的と考えられなければならない。しかしかかる歴史的形成作用に於て、種と世界との間の相互媒介として、我々の個人的自己というものが働かなければならない（九・三九三）。

このように、西田は、歴史的種による形成を語るとともに、その媒介としての個（物）による制作についても検討を加えていく。

本来ならばここで個の制作について西田の論述を詳しく検討しなければならないが、概略を示すに留めたい。西田によれば、個が物を作る制作において世界は現実には形を變ぜられ、新たな形を持つ。そして、個が制作の主体として働く時、個の身体は単なる生物的な身体ではなく、歴史的な身体としての意義を獲得する。そこで個が「創造的世界における創造的要素」として形を生み出す時、生命は最も本質的な姿を表すと西田は考える。

### むすびにかえて

これまで見てきたように、西田は生命において生み出される形に注目し、そのありようを様々な仕方で見ている。まず初期の思索において、形は造形芸術との関わりにおいて考察された。中期以降、西田の哲学における論理化の試みと並行して、生命の持つ論理が追求され、やがてその形は生命の弁証法的論理を証示するものとして捉えられた。すなわち、主体（個物であり種である）と環境との間の弁証法的関係性の中に、創造的な運動としての生命が意義付けられた。序の中で触れた西田の高坂に宛てた言葉に立ち戻るならば、西田において生命は現実世界における形成作用としての

創造性として、生物的生命としては自己の身体の形成的維持であり、それが生物的種の維持とも重なりを持ち、また歴史的生命としては個においても歴史的種としての社会においても、物を作り出すという制作によって歴史的形成的に世界自身を形作る働きを意味する。歴史的種は動的なイデアとして形成作用の形を絶えずメタモルフオーゼしていくが、その際、個物的な多は全体的的一的種を媒介としながらも種の形を破るものとして、種から自立した制作の主体となっている。いわばこの二重の主体性によって世界は創造的に形作られ、何処までも変じながら存続していく。今回は主体としての個の制作という点について詳しく論ずるとまはなかつたが、今後検討されるべき研究課題であることを指摘し、結びに代えたい。

## 注

(1) 一〇・二三一 以下同様に、西田からの引用には新版『西田幾多郎全集』（岩波書店、二〇〇二年）を用い、巻号と頁数のみを示した。また、表記は適宜現代表記に改め、人名や用語も現在主に通用しているものに統一した。

(2) 二三・二八五

(3) 九・二七二

(4) 西田は例えばフィードラーの「眼の仕事の終わった後を受けて手が発展させる」といった主張にも強く共感し、同じく

何度か引いていたから、おそらくはその脈絡においてヘルクソンの眼に関する論述との関連づけが図られたものと思われる。

(5) 「エラン・ヴァイタールは単に流れ行くものではなくして、……それは造形的でなければならぬ。創造作用は形成作用でなければならぬ」(七・一四四)。

(6) アリストテレスの哲学については、『形而上学』、『自然学』、『ニコマコス倫理学』などの著作がよく読まれ、また研究の対象とされることが多いが、生物学関係の著作はその著作群全体の約二五%を占めるとされ、彼の哲学を理解する上で重要な意義を持つとされる。しかしながら、専門家の間でさえ前

者の諸著作に比べてあまり読まれているとは言えない。西田の時代にも事情はさほど変わらないはずだが、ギリシア哲学の専門家でない西田が自らの関心から食欲にそうした領域の著作を読んでいたことには驚かされる。その西田が読み込んでいたのは、そうした著作のひとつである『動物部分論』である。

(7) アリストテレス、『動物部分論』、坂下浩司訳、京都大学学術出版会、二〇〇五年、三六―七頁。なお、いちいち断らないが、当該の著作におけるアリストテレスの主張を解釈するにあたって、筆者は訳者注解からも多くの示唆を得た。

(8) 同書、三八頁。

(9) 『形而上学』においても、働き(エルゴン)が現実態(エネルゲイア)の語源であることが指摘されている。『形而上学』下巻、出隆訳、岩波文庫、一九五九年、四二頁)。

(10) 八・一一

(11) 八・一九

(12) ちなみに、当時生物についてこうした捉え方を採用していた日本の生物学者に今西錦司がいる。今西は『生物の世界』(一九四一年)において、「構造的即機能的」というある意味で西田よりも西田的な表現でもって、生物の身体に見られる構造と機能の一致を主張している。本論文では今西と西田の関係について触れられなかったが、野家啓一「主体と環境の生

命論——西田幾多郎と今西錦司」(『日本の哲学 第三号』所収、二〇〇二年、昭和堂)において詳しく検討されている。

(13) G. E. アレン、『20世紀の生命科学I』、長野敬・鈴木伝次・鈴木善次共訳、サイエンス社、一九八六年、五〇頁

(14) J. S. Haldane, "The philosophical basis of biology", 1931, *honder and stoughton limited*, p23-5

(15) *ibid*, p18

(16) 八・一九

(17) 八・二三四

(18) 十二・三六五

(19) 西田が知る範囲の種概念は、おそらくスウェーデンの博物学者リンネが提唱したものを祖形とする概念であると思われる。一九三二年出版の『岩波講座生物学概論』(丘英通著)によれば、当時普通に生物学者が種という場合リンネ式の種を指すとされる。この一般にリンネ種と呼ばれる種概念は、形態の似た生物集団を一つの単位と見て固有の名前を与えるという、生物の形態の不連続を基礎として成立するもので、後にフランスの植物学者ジュールタンによる修正が加えられた。(『岩波生物学事典』、岩波書店、一九九六年、六〇三―四頁)。

(20) 八・一一〇

(21) ここで注意しなければならないのは、西田において「人

「間命的生命」として言及されるのは、我々人間にだけ見られる生命の特質を指すのであって、「人間の生命」⇨「間命的生命」という意味ではない。我々は間命的生命であるとともに、生物的生命としての側面も併せ持つ。通常、一般の生物は(そうした特質しか持たないため)生物的生命とほぼ重なるものとして考えられるのだが、人間のみがそれとは別の側面を持つと考えられるのである。

(22) ただし、西田においてそれは単に社会という言葉を用いて換えたものではなく、人間のみが属している諸々の集合を包含している。すなわち、より具体的な種の形態として「文化(形態)」「や」「民族」「国家」といったものもそこに含まれる。

(23) 八・一四四

(24) 同所

(25) 七・一四五―六

(26) 八・一六一

(27) 例えば、三木や務台においては同様の種に対する扱いがなされている。

(28) 九・四四

(29) 九・四二

(30) 同所

(31) 九・四二

(31) このメタモルフォーゼという言葉は、本来生物の形態が劇的に変化する様を捉えたものであり、morphology(形態学)の祖としても知られる文豪ゲーテが自らの研究の中で重要な意義を与え、頻繁に用いていた。西田はその言葉を生物のみならず、広く文化や社会の形態(⇨構造)の変化を意味する表現として用いた。